

北東アジア学会つうしん 第36号

The Association for Northeast Asia Regional Studies
Newsletter(anears)

発行 北東アジア学会事務局

〒910-1195 福井県吉田郡永平寺町松岡兼定島 4-1-1

福井県立大学経済学部 唱 新研究室

電話 0776-61-6000(内線 2507) / FAX 0776-61-6014

E-mail: anears@fpu.ac.jp / URL <http://www.s.fpu.ac.jp/anears/>



目 次

- 1面 巻頭言 当面する世界経済危機と北東アジア学会 ……山村 勝郎 (金沢大学名誉教授)
- 2面 北東アジア金融協力の新局面—北東アジア経済フォーラム天津会議報告…千葉 康弘 (元秋田経済法科大学教授)
事務局からのお知らせ—会費納入と会員拡張のお願い
- 3面 韓国東北亜経済学会 2009年国際学術大会への参加報告…海老原毅 (富山商船高等専門学校)
第6期第1回常任理事会報告
- 4面 トピックス・北東アジア学会優秀論文賞の推薦について・北東アジア学会学生奨励賞報告・会員情報

巻頭言

当面する世界経済危機と北東アジア学会

山村 勝郎 (金沢大学名誉教授)



現在の世界金融危機、世界同時不況は、これまでの体制が歴史的転換期に入ったことを示すものである。これは多くの人々に共通した認識である。

ところで、我々は現在と同じく新しい世界秩序が生まれると期待した経験を持っている。それは東西冷戦の終焉時である。ベルリンの壁の崩壊、ソ連・中国と韓国の国交樹立、ソ連の消滅、朝鮮半島南北の同時国連加盟等、国際関係の急変が起った。この変化は長年冷戦対立の最前線にあって不断の危機に悩まされていた日本海側の人々に影響を与えないはずがない。日本海が平和と交流の海に変えれば、地域振興に繋がると期待した。その期待は植民地政策の批判と日本海沿岸諸地域の共生を目指す環日本海交流圏構想へと発展した。こうした状況を背景に設立されたのが環日本海学会である。

学会の特色は、発展の遅れた北東アジア地域に目を向け、国境を越えて進展する地域交流（地域住民レベルでのグローバル化）を新しい研究対象とすることであった。しかし、そ

の後の東アジアの発展は、我々が当初抱いていた構想とは全く異なるプロセスを辿った。それは我々の視野が日本海を囲む諸地域に限定され、域内での開発と交流を狭く考えていたからであろう。だが、近年の東アジアの急速な経済成長は、アメリカを基軸とする世界的規模のグローバリゼーションの波に乗った高度成長であり、このグローバル経済は「21世紀に入って人類の歴史始まって以来の高成長の同時化」とさえ言われる状況が続けた。

ところが、昨年秋、ウォール街金融破綻を契機にして、あっという間にこの世界経済構造は機能不全に陥った。この危機の本質を真剣に考えることがアジアの未来を展望する基盤になるだろう。そして北東アジア学会としては、設立時に抱いた国境の枠を超えた地域住民レベルの交流という理念をもう一度思い出したい。今回の世界金融危機の中から生れるであろう新しい世界システムにおいて、アジア地域が重視されるのは確かであるが、その中で我々の理念をいかに実現するかが何よりの課題となる。

北東アジア金融協力の新局面

—北東アジア経済フォーラム天津会議報告—

千葉 康弘 (元秋田経済法科大学教授)

世界的金融危機の最中、08年10月に国際的 NGO・トラック2の北東アジア経済フォーラム(第17回会議)が07年10月の北陸会議(富山市)に引き続き、天津市で開催された。ここでは開発金融協力の手法としての北東アジア開発銀行(NEADB)構想が取り上げられた。具体的にはアジア開発銀行との補完関係としてのサブリージョナルな開発銀行“北東アジア開発協力銀行”が提案され、北東アジア地域の金融機関として機能させるべく“開発銀行”実現のための「北東アジア金融協力研究センター」が開設された。

これまでの代表的な北東アジアの開銀構想は①カッツ案(1997年、元アジア開発銀行副総裁スタンリー・カッツ提案)、②TF案(2002年、東京財団 NEADB 研究プロジェクト・チーム提案)であった。天津会議で天津市から提案された中国南開大学経済学院執行院長・馬君潞教授の発表した「北東アジア銀行の構築設計案」(以下、TJ案)は第3の案として位置づけることが出来る。これまで時間軸、空間軸の制約の中で①、②案を中心に様々な提案がなされてきた。TJ案は20年間に渡る開銀論議を背景に北東アジア経済フォーラム案として昇華し、実現可能な案になりうるかどうかはこれからの研究センターを中心とした研究ネットワークでの研究に依存すると言える。TG案は公表されている資料から読み取るならば政策志向の準商業銀行、サブリージョナル地域開発銀行である。「北東アジア銀行」案から「北東アジア協力開発銀行」案へと発展すべく、段階論アプローチをとっている。“協定”に盛り込む設立の目的、具体的な出資国および地域の加盟主体資格、組織・機構(理事会の構成等)、規約、資本規模ならびに応募シェア、投融資対象地域と業務内容など詳細な論理的構成はこれからの研究に依存している。S.カッツはこれまでの経験則から“日中韓のハイレベ



ルの指導者の信任“をえて、政府間の支持を取り付けることがポイントとなることを指摘している。本部の設置都市をどこにするか、総裁及び銀行の主要幹部の地域的な配分等、ADB設立時にみられたようなパワーポリティクス of 事柄が生じ、各国政府の関与の軽重によりその設置の正否に大きな影響を及ぼすことになる。北東アジアの平和構築への“熟成度”を測るバロメータともなりうる研究課題である。

尚、天津会議の概要は拙稿「北東アジアの開発金融協力—開発金融支援ネットワークの構築—」環日本海経済研究所『ERINA REPORE』vol.86 2009.2を参照されたい。

事務局からのお知らせ

会費納付と会員拡張のお願い

つうしん本号に同封の会費納付のご案内で金額(過年度未納分がある方は併せてご請求申し上げます)をお確かめの上、同封の郵便振替払込票をご利用ください(払込手数料は会員負担)。

また、学会組織として、本学会をとおした学究・交流活動を促進し、発展させていく観点と学会運営の財政的安定化を図る観点から、新入会員の勧誘につき、会員のみなさまのご理解とご協力をお願い申し上げます。

韓国東北亜経済学会 2009 年国際学術大会への参加報告

海老原毅 (富山商船高等専門学校)

2月11日(水)から13日(金)にかけて、韓国東北亜経済学会主催の国際学術大会に参加するため、学会会長の坂田幹男教授(福井県立大学)、今村弘子教授(富山大学)とともに韓国ソウルに滞在した。

11日午後、現地に到着後、韓国東北亜経済学会会長の柳熙汶教授から歓迎を受けるとともに、懇談の場を設けていただいた。また、同日夕方には同学会会員の金昌男教授、李鴻培教授から夕食に招待され、最近の日韓情勢や両学会の交流について歓談した。筆者にとって学会交流に参加することは初めてであったが、和やかな雰囲気の中で話が展開されたので大きな違和感もなく加わることができ安堵した。

国際学術大会は12日に成均館大学で開催された。今回の大会には、韓国東北亜経済学会の招待で中国マクロ経済管理教育学会からも会長以下3名の会員が参加していた。韓国東北亜経済学会にとって初の3ヶ国参加者からなる大会であったことを反映してか、大会のテーマには「世界経済秩序と東北アジアの協力」が掲げられるとともに、計4つのセッションのうち、2つが韓国語によるセッション、1つが日本語によるセッション(北東アジア学会会員による発表)、もう1つが中国語によるセッション(中国マクロ経済管理教育学会会員による発表)という構成になっていた。日本語と中国語によるセッションが設けられる点に、韓国東北亜経済学会における日本研究者および中国研究者の層の厚さが感じられる。坂田教授が「東アジアの地域統合とサブ・リージョンとしての

北東アジア」について、今村教授が「中国と北朝鮮の経済関係」について、筆者が「1990年代後半における中国対外政策の変化と日中関係への影響に関する一考察」について研究報告を行い、韓国側から各2名の討論者がコメントを提示した。コメントには韓国の視点が含まれており、日本での議論にはない新鮮さを感じることができた。

同日夕刻の懇親会は、上記3学会のメンバーが一堂に会して行われ、韓国語を中心に英語、日本語、中国語が飛び交う国際交流の場となった。近年の中韓関係の緊密さを示すのかのように、中国語を流暢に話す韓国側参加者が少なくないことが目を引いた。その点も含め、韓国東北亜経済学会の国際交流に対する意欲が感じ取れた。来年10周年を迎える北東アジア学会と韓国東北亜経済学会の学術交流は新たな段階への変化が求められているのかもしれない。

最後に、今回の派遣に当たって学会旅費助成を受けたことに深く感謝申し上げる。



第6期第1回常任理事会報告

第6期第1回常任理事会がメーリングリストを通じて、2008年12月19日から26日の一週間にわたって、開催されました。議題は以下の通りです。

1. 事務局からの日常業務の報告
2. 韓国東北亜経済学会年次大会へ坂田幹男(福井県立大学)、今村弘子(富山大学)、海老原毅(富山商船高等専門学校)の派遣について、承認されました。
3. 入会者・退会申請について、会員情報の通り承認されました。
4. 提案のあった NEASE-NET のメーリングリストへの接続について、今回は見送ることになりました。

トピックス

躍進する青島港

117年の古い歴史を持つ青島港（巻頭写真）は、海陸一貫輸送を行い得る環黄海地域の最も重要な貿易港である。青島市は人口が750万人、2008年のGDPが前年比13.2%増の4436億人民元（約6兆3,213億円）であり、産業、観光、海運などが発達する新興都市であるが、その背後地として、人口9300万の山東省をはじめ、河南、河北、山西、陝西、甘肅、寧夏、新疆などの中西部地域及び中央アジアを有している。さらに近年、大連、天津などの北方港湾の欧米への中継貿易港としても、脚光を浴びている。

青島港の波浪条件は静穏であり、河川土砂の流入による港湾埋没は発生せず、大部分の航路水深は15m以上という天然の良好である。2000年以降、港湾の建設が急ピッチで進展してきた。現在、前湾港区、石油港区、旧港区など、三つの港

区があり、60ヶ所の埠頭（内1万トン以上の埠頭42ヶ所）があり、バース延長が14,163mである。海上航路は2008年現在、140ヶ国の450の港と結ばれている。港湾建設の進展に伴って、貨物の取扱量が2000年の8,636万トンから2008年の3億トン、コンテナの取扱量が同212万TEUから同1,037万TEUへと急拡大してきた。

青島港の特徴は海陸一貫輸送の急進展である。現在、内陸輸送として、コンテナ専用列車があり、青島から重慶、成都、武漢などの西南地域及び西安、新疆などの西北地域、さらに新疆を経由して、中央アジア、ロシア、欧州と接続している。現在、青島港から内陸への輸送が60便/月、中央アジアへの海陸一貫輸送が40便/月で、コンテナの海陸一貫輸送量が年間16万TEU（08年の実績）で、チャイナ・ランドブリッジの最大基点となっている。（文責：唱新）

北東アジア学会優秀論文賞の推薦について

「北東アジア学会優秀論文賞」は、本学会の若手研究者の育成と本学会の研究水準のいっそうの向上を企図しており、若手研究者のみならずのよりいっそうの研鑽と、諸兄の若手研究者に対する教育・研究指導のいっそうの充実を期待して、学会設立10周年を記念して創設されました。今年度対象となるのは、

1. 2008年6月1日から2009年5月末日までに発表された単著論文。

2. 論文発表時、年齢が40歳未満、または大学院生。
3. 『北東アジア地域研究』掲載論文、または他の査読付き論文。などの条件を満たすものです。なお、自薦・他薦を問いません。ふるってご推薦ください。推薦締切は2009年6月30日です。

推薦する会員は、推薦書の様式を学会ホームページ（<http://www.s.fpu.ac.jp/anears/>）からダウンロードし、必要事項を記入の上、学会事務局までお寄せください。また、別途、当該論文の現物5部を学会事務局までご郵送ください。

北東アジア学会学生奨励賞について

今年度の北東アジア学会学生奨励賞は、富山商船高等専門学校の君塚成美さんの研究「中国高等教育の大衆化と地域間格差—後期中等教育との関連を中心に—」に授

与された。同研究は、中国の高等教育は後期中等教育と関連を持つことに着目して、義務教育重視政策と戸籍制度改革の2点から高等教育の地域間格差是正に向けた中国政府の取組みに関する分析をおこなった。

会員情報

1. 新入会員（2008年12月19日 第6期第1回常任理事会承認）

一般会員 芮京祿（イェ キョンロク）

国土交通省国土技術政策総合研究所

金奉吉（キム ボンキル）

富山大学経済学部

2. 退会者（2008年12月19日 第6期第1回常任理事会承認）

一般会員 奥村 義雄 森山 誠一 井村 哲郎 西川 潤 古川 勉 谷川 克己 桂木 健次

海外会員 鄭 光敏

団体賛助会員 ノースアジア大学